南湖碑　和歌　解説

【関の湖】（漢名＝南湖、以下括弧内は漢名）

近衛基前（公家、一七八三～一八二〇）

影うつる　山もみとりの　波はれて
見わたしひろき　関のみつうみ

（影写る　山も緑の波はれて　見渡し広き関の湖）

【共楽亭】（漢名同じ）　松平定信（一七五八～一八二九）

やま水の　高きひききも　隔なく
共にたのしき円ゐすらしも

（山水の　高き低きも隔てなく　共に楽しき円居すらしも）

＊円居＝ひと所に集まり会すること。

【鏡の山】（明鏡山）　松平定信

湖の　ここもかかみの　山なれや
こころうつさぬ　人しなければ

（湖の　ここも鏡の山なれや　心映さぬ人しなければ）

【真萩か浦】（万花岸）

芝山持豊（公家、一七四二～一八一五）

かけひたす　波も錦に　よせかへる
真萩か浦の　花さかりかな

（影ひたす　波も錦に寄せかえる　真萩が浦の花盛りかな）

【錦の岡】（濯錦岡）
加納久周（伊勢八田藩主、一七五三～一八一一）

ささ浪の　なみに浮める　花紅葉
にしきの岡の　春秋の色

（さざ波の　波に浮める花紅葉　錦の岡の春秋の色）

【松虫の原】（鳴秋原）
佐竹義和（秋田藩主、一七七五～一八一五）

旅ころも　ゆききかさねて　いく秋か
めてみん千世を　松むしの原

（旅衣　行き来重ねて行く秋か　愛で見ん千世を松虫の原）

【常盤清水】（玉花泉）
牧野忠精（越後長岡藩主、一七六〇～一八三一）

万代を　懸てむすはん　深みとり
ときはの清水　たへぬ流に

（万代を　懸けて結ばん深緑　常盤の清水　絶えぬ流れに）

【松風の里】（松濤里）
小笠原長発（陸奥棚倉藩主、一七六一～一八一二）

世のちりは　よそにはらへる　松風に
この里人や　千代おくるらむ

（世の塵は　よそに払える松風に　この里人や　千世送るらん）

【月待山（つきまつやま）】（問月嶺（もんげつれい））

広橋伊光（これみつ）（公家、一七四五～一八二三）

うちむかふ　月まつ山の　きり晴て
さきたつひかり　そらにくもらぬ

（うち向かう　月待山の霧はれて　先立つ光　空に曇らぬ）

【月見浦（つきみがうら）】（逗月浦（とうげつほ））

烏丸資薫（からすまるすけただ）（公家、一七七二～一八一四）

たくひあらし　出しほの影も　秋にすむ
月見かうらの　なみのみるめは

（類（たぐい）あらじ　出潮（でしお）の影も秋に澄む　月見が浦の　波のみるめは）

＊出潮＝月の出とともに満ちてくる海の潮。
＊みるめ＝海藻の一種。和歌では「見る目」とかけて使われる。

【下根（したね）の島】（蒹葭洲（けんかす））

大久保忠真（ただざね）（相模小田原藩主、一七八一～一八三七）

せきのうみや　下根の嶋の　秋くれて
月かけさゆる　あしのむら立

（関の海や　下根の嶋の秋暮れて　月影冴ゆる　芦の群立（むらたち））

【御影の島】（玉女島（ぎょくじょとう））

有馬誉純（しげすみ）（越前丸岡藩主、一七六六～一八三六）

神のます　みかけのしまの　松か根に
とはにそよする　なみの白ゆふ

（神のます　御影の島の松が根に　とわ（永久ヵ）にぞ寄する　波の白ゆう）

＊ゆう＝楮の樹皮を剥ぎ、細かくさいて糸にしたもの。神事や祭りに使われる。

【千世の堤】（使君堤）
堀田正敦（下野佐野藩主、一七五五～一八三二）

雨風に　ゆるかぬ千世の　堤こそ
くにを守りの　すかたなりけれ

（雨風に　揺るがぬ千世の堤こそ　国を守りの　姿なりけれ）

【小鹿山】（鹿鳴峰）
阿部正精（備後福山藩主、一七七四～一八二六）

をしか山　月にはなれし　つまこひの
うらみやふかき　関のみつうみ

（小鹿山　月にはなれし妻恋いの　恨みや深き　関の湖）

【有明崎】（暁月渚）
広橋胤定（公家、伊光の子、一七七〇～一八三二）

しら川の　関のやま風　ふくるよの
月かけてらす　有明かさき

（白川の　関の山風吹くる夜の　月影照らす　有明が崎）

【八聲村】（五徳村）
土井利徳（三河刈谷藩主、一七四八～一八一三）

明ぬよの　夢や覚ると　庭つとり
やこえのむらに　行てねましを

（明けぬ夜の　夢やさめると庭つ鳥　八声の村に　行きて寝ましを）

＊庭つ鳥＝にわとり。

【千代の松原】（一字松（いちじしょう））

三條実起（さねおき）（公家、一七五六～一八二三）

立ならふ　みとりの色の　さかへつつ
すえ限りなき　ちよの松原

（立ち並ぶ　緑の色の栄えつつ　末限りなき　千代の松原）